



北方民族博物館だより

No.59



【博物館協定書調印】

当館は海外の北方地域の博物館との間で、文化人類学および博物館学等に関する学術交流を進展させたいと希望し、ロシアやアメリカの関係する博物館と交渉を行ってきました。その結果、このたびアラスカ大学北方博物館、ロシア・サハ共和国の国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館との間で学術交流を進めるための協定を交わすこととなり、今回のシンポジウムに両館の館長が発表者として参加されたことから、平成17年10月22日に協定の調印式をシンポジウム会場で開催いたしました。今後、ロシア・マガダン州郷土博物館、ロシア・カムチャツカ州郷土博物館とも協定を交わす予定です。(6～9頁に関連記事)

写真：左からイゴール＝シシーギン氏（国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館長）、谷本一之当館長、アルドナ＝ジョナイティス氏（アラスカ大学北方博物館長）

- 1 博物館協定書調印
- 2 特別展 アイヌと北の植物民族学～たべる・のむ・うむ～
- 3 特別展関連講演会「草木のいのちを食す」
- 4 親子講習会「ウバユリからでんぷんを採ろう」/
草木染め体験／アットウシ織り実演とキナ織り体験
- 5 山の幸をつかったアイヌ料理
- 6 第20回北方民族文化シンポジウム
- 10 発掘調査
- 11 ロシアの家庭料理・体験教室／素敵な革細工
- 12 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

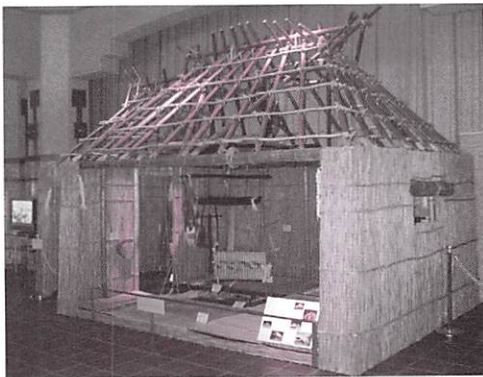
第20回特別展 アイヌと北の植物民族学

たべる・のむ・うむ

2005. 7. 16 - 10. 10

今夏、開催した特別展は、連続テーマ「生業」の4回目、初年（平成14年）が「狩猟」、翌年は漁労と海獣猟すなわち「水産資源利用」、昨年が「牧畜」、そして今年が「採集」という流れで計画されたものでした。北方諸民族の生業は、これらの組み合わせにより成り立っており、なかでも比較的植物資源の豊かな北海道のアイヌ文化は採集に依存する割合が高くなっています。展示ではアイヌ文化を中心にしながら、サハリン、アムール流域、カムチャツカ、アラスカ、カナダなどの先住民の植物利用について、特に食用（食べる）・薬用（飲む）・編織物の素材としての繊維の利用（績む）に焦点をあて、季節ごとのくらしもわかるような構成としました。また、北方地域においても植物が重要な役割を担ってきたことを示しました。以下に展示内容の概略を紹介します。

植物に囲まれたくらし チセ



財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構蔵

アイヌの伝統的家屋であるチセは、ヨシやススキなどのいわゆる茅葺きで、内部の床や壁にはガマ製のごが敷き詰められています。ここでは、内部が見えるように復元された実物大のチセを展示し、植物に囲まれた生活を実感してもらうことができたと思います。

植物の採集・保存・加工

根茎類、若芽や茎葉、果実といった食用植物を採集するために使う掘り具やナイフ類、収穫物を運ぶための負い縄のついた袋や背負子とともに、それらを使って

いる様子の写真を展示しました。これらの民具のほか、アクリル樹脂封入標本や乾燥標本、保存食など、実際の植物やその加工品も多数用いました。

繊維の利用

樹皮や草の葉・茎からとった繊維（糸にしたもの）とともに、布や籠など編み織り製品を展示しました。北太平洋沿岸地域に共通して見られるハマニンニク（テンキグサ）製のバスケットは各地のものを並べ、近年復元されたアイヌの同素材のものも展示しました。

薬用植物

北へゆくほど有用植物の種類や用途は限られたものになってきますが、ツンドラ地帯においても植物は薬や染料、儀礼具など生活に欠かせないものとして利用されてきました。最近収集された薬草を中心に、今もお茶として愛飲されているものや儀礼に使われるものなどを紹介しました。



これら植物の利用に関する技術や知恵は、伝統的な文化が変容していくなかであっても、多くが女性によって伝えられ、現代まで継承されてきています。資料は古いものばかりではなく、近年つくられたものに製作者名を付して展示することで、今も伝承されていることを示したつもりです。また、最近撮影された映像資料を用い、植物を扱う技術についても紹介しました。実際に関連行事でもオオウバユリからのでんぷん採取、草木染、織物、料理と体験的な講習会を行いました。

会期は82日間と例年よりもロングランで、観覧者数は近年実績としては多い6,008名でした。ふつうに見られる山野の植物を素材にただけに、身近なテーマと感じてもらえたこと、また、アイヌ文化への関心の高さの現れであると感じています。

最後に、特別展の開催にご協力いただいた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

（学芸課 齋藤 玲子）

特別展関連講演会 草木のいのちを食す

2005. 7. 30

講師：小山修三氏（吹田市立博物館館長・
国立民族学博物館名誉教授）
山岸喬氏（北見工業大学教授）

特別展に関連し、特に食用・薬用を中心に植物が人びとの歴史・生活の中でどのような役割を果たしてきたかを紹介する講演会を開催しました。講師は学際的かつ地域的にも幅広い調査研究活動をしてこられたお二人で、北海道に隣接する本州北部から東アジアや北太平洋沿岸地域の例など多数ご紹介いただくことができました。それぞれ一時間ほどご講演いただいた後、対談と質疑応答の時間をとり、しめくりました。以下にそれぞれの講演の要点を紹介します。

「野生食を訪ねて ～三内丸山から北海道、
そしてカナダの森へ～」 小山修三氏



植物利用あるいは広く採集狩猟民の文化についての研究は、現代の文化人類学の分野では流行りではないが、重要な課題である。また、植物の採集と加工は主に女性の仕事で、女性によって支えられている社会は多い。男性研究者のとらえた社会とは別の視点も必要であろう。

日本は森林資源に恵まれた土地で、多様性も持っている。青森県の巨大な縄文遺跡である三内丸山の調査は、私がかつて研究しようとしたカナダの森に導いた。高緯度ながら巨木を扱う技術を持ち、多数の人口を抱える社会は、北西海岸インディアンの文化と共通している。彼らの土地を訪ね、植物に関する知識の現代的な伝承の様子を知ることができた。三内丸山遺跡の今後の活用についても、海外の事例を参考にしつつ、考えてみたい。

「アイヌの植物利用 ～近隣民族との類似点～」

山岸 喬氏

アイヌ民族と大陸との関係を深く裏付けるものとしてトリカブト毒の利用がある。この利用はチベットから中国東北部まで続いており、元寇の役において日本の兵士が苦しめられたことが知られているが、元が樺太にきたこととアイヌ文化の成立とは、関係があると考えている。

アイヌの薬草には、信仰にもとづくものも多くあるが、実際に薬効の確認されているものも少なくない。また、漢方薬と共通するものもあり、ここからも大陸との結びつきを推察することができる。

一方で、アムール流域に多く自生するキハダの実は、アイヌにとって重要な食用・薬用植物であるのに対し、アムール地域の先住民は実を利用しないなど、独自の文化も認められる。アイヌと周辺民族との植物利用の比較研究は、これからも進めていきたいテーマである。



左から山岸氏、小山氏、齋藤

講演の後の座談会は、主に参加者からの質問を受ける形で展開しました。前半では、三内丸山遺跡やアムール流域などで北海道と同種の植物が生育していても、用途の異なるものがあることが紹介され、科学的な理由ではなく、文化的志向であろうとの見方が示されました。

また、アイヌが伝統的につかっていた有用な植物について、現代社会でどう活用できるかという話題に多くの関心が寄せられました。実際に山岸先生は、ハマナスをつかった健康食品の開発に携わっておられるとのことでした。参加者の中には、アイヌ文化を受け継いでいる方がおられ、実体験も披露していただけました。

先住民の知恵、特に薬用植物など健康に関するものは、今後の研究・開発が期待される分野です。また、生態系をまもるための知識や精神文化が現代に活かされるべきだという意見も賛同を得ました。

親子講習会 ウバユリからでんぷんを採ろう

2005. 7. 23

講師：内田祐一氏（帯広百年記念館学芸員）

オオウバユリ（アイヌ語でトゥレブ）は、鱗茎^{りんけい}から良質のデンプンが採れるため、アイヌの人たちは昔から食料としてきました。この講習会では、まず初めにオオウバユリの生態、デンプンのさまざまな利用法、デンプン採取方法の地方差などについて講師から説明を受けました。

その後、野外に出て実際にオオウバユリの根を掘ってみました。そして、鱗茎の一枚一枚をきれいに洗い、簡便な方法としておろし金ですりおろしてザルで漉し、水を張ったボウルに入れ、デンプンが沈殿するの待ちました。おろし金をつかったほか、本来のやり方である臼^{うす}と杵^{きね}を使って、鱗茎をつぶす方法も試してみました。



写真中央が講師の内田氏

アクを抜くには、うわずみを何度か取り替える必要があるため、時間内に食べられる状態にはなりませんでしたが、講師が用意してくださったデンプンをお湯で溶き、いわゆる「ねっかき」（くず湯よりやや固めの状態）をつかって試食もしました。現代っ子の小学生からは、「味がしない」「食べたくない」という感想もありましたが、親世代には「甘みがあって、片栗粉やくず粉より美味しい」と好評でした。博物館の職員でも初めて食べたという人が多く、よい経験になったという声がかれました。

《北の文化・体験スクール》 草木染め体験

2005. 8. 20

講師：齋藤玲子（当館主任学芸員）

キハダの樹皮を砕いて煎じ、ハンカチやスカーフなどを染めてみました。鮮やかな黄色の染め上がりに、「思っていた以上に濃い色に染まり、草木の力を改めて感じた」などの感想が寄せられました。

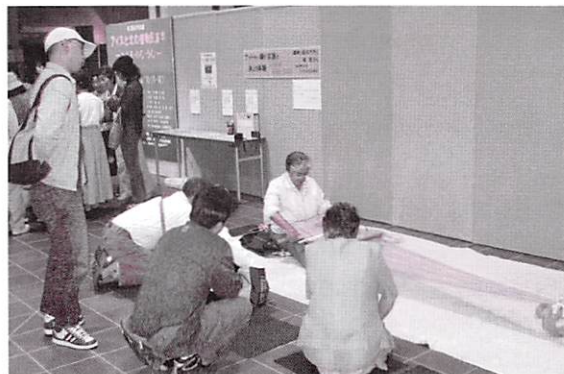


アットウシ織り実演と キナ織り体験

2005. 9. 18

講師：遠山サキ氏、堀悦子氏
（浦河町 アイヌ文化伝承者）

「アットウシ織り実演と糸より体験」（午前）
特別展で展示していたアットウシの織機を用い、ロビーで実演をしていただきました。一反分（約6m）の糸の端を柱に固定し、もう一方の織った布の側は巻き取って織り手の腰に固定します。からだ全体を使って織り進める作業は非常に力のいることで、また、目を揃え



実演をする遠山氏



糸よりを指導する堀氏

で織り進めるには熟練の技が必要なことがわかります。

そして、織機の構造について頭ではわかっても実際に手と糸の動きを見ると、布が織りあがる仕組みがよく理解できます。

織りの実演と並行して、アットウシの素材であるオヒョウの樹皮からとった繊維で、糸のより方を体験してもらいました。同じ太さと調子で糸をよっていくのは意外に難しく、参加者はかなり真剣に取り組んでいました。ロビーでの公開の催しでしたので、約50名と多くの方に体験いただくことができました。

「キナ織り体験」(午後)

午後の講習会では、材料や道具の関係から定員12名でキナ(ガマ製ござ)のミニチュアづくりをしました。

「イテセニ」と呼ばれる織り機またぎは、ミニチュア用に6つの刻みを入れた横板を股木で固定したものです。6本の糸の両端に12個の重石を結びつけて中央を刻み目にかかけます。横板の上にガマをのせ、糸を交互(前後)にかけていき、織り進めます。途中、黒と赤に染めたシナノキ樹皮で模様を編みこみ、3時間かけて、花瓶敷きくらいのキナを完成させました。

ここでは綿糸を用いましたが、本来は午前中に体験したように植物繊維をよった糸を使うため、織り始めるまでの準備に長い時間を要します。更に、自然素材は太さや色などがまちまちで扱いにくいものです。一方で、ひとつひとつ風合いの違う仕上がりの楽しみも感じていただけたようです。



右が講師の遠山氏

*この行事は(財)アイヌ文化振興・研究推進機構の「アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業」の助成を受けました。

《北の文化・体験スクール》 山の幸をつかったアイヌ料理

2005. 10. 1

講師：床明氏、床みどり氏

(阿寒町 民芸品・喫茶店経営/アイヌ文化伝承者)

特別展開連行事の最終回では、実りの秋を迎え、山の幸をたっぷりつかった料理をつくり、試食しました。

今回のメニューはアママ；炊き込みご飯(ハマナスの実、ヤブマメ、ヒシの実、モチキビ)、ラタシケフ；煮物(カボチャ、キハダの実、ヒシの実、豆、トウモロコシ)、和え物(キノコ、ギョウジャニンニク)、ヤマウ；冷たい汁物ほしだら(干鰯、ワカメ、ギョウジャニンニク、キュウリ、ニンジン、長ネギ)、それにシケレベ(キハダの実)のお茶という、いわばフルコースでした。

ハマナス、ヒシ、キハダの実など、知ってはいても食材としてはあまり馴染みのないものも多く、参加者は種をとったり、殻を外したりの作業も興味津々で行っていました。

アイヌ料理の店を営まれる講師ご夫妻の指導で調理はスムーズに進み、予定通りの時間に料理が完成しました。食べる前に、講師の床みどりさんから、子どもの頃の食事の内容や、現代風にアレンジしながら今もそれを受け継いでいることなどをお聞きし、アイヌ語で「イペアン(たべましょう)」と声をかけていただきました。素材の味を活かしたあっさりとした味付けは、大変好評でした。

大学生から70歳代の方までの幅広い年齢層で、男性も3人、地域も網走近郊を中心にあちらこちらから参加していただきましたが、一緒に調理をした後の試食は、和気藹々とした雰囲気あいあいで会話も弾み、多くの感想も寄せられました。



立って説明をする床みどり氏、左奥が床明氏

(特別展開連事業報告 学芸課 齋藤 玲子)

特別展開連事業はこの他に、「展示解説会」(7月16日開催)がありました。

第20回 北方民族文化シンポジウム 20回記念大会

2005. 10. 21 - 10.23

会場 オホーツク・文化交流センター

今回のシンポジウムは20回という節目にあたることから、記念大会と位置づけて実施しました。第1日目にアイヌの楽器トンコリとモンゴルの楽器・馬頭琴および喉歌の演奏によるコンサートを開催しました。

今回のシンポジウムでは、これまでも東西、南北の諸文化が行き交う地域として北太平洋沿岸地域に注目し、その共通する文化に焦点をあててきましたが、内外の多数の研究者の参加を得て同地域の文化のあり方について再検討が加えられました。また、当館と海外博物館との学術交流を進めるため、当シンポジウムの日程のなかで海外の博物館二館との協定が約されました。(表紙参照)

■第1日目 10月21日 [金]

【コンサート】

北方の民族音楽「トンコリと馬頭琴の調べ」

演奏 OKI氏(トンコリ演奏者)

嵯峨治彦氏(馬頭琴・喉歌奏者)

当コンサートはオホーツク・文化交流センターとの共催で実施されました。

コンサートはアイヌの伝統楽器トンコリの演奏から始まりました。演奏者OKI氏は国内外のコンサートに数多く出演し、いくつもアルバムを出されています。代表的な曲「ケント ハッカ トッセ」(目の不自由な男ケントが、杖を使って風に吹き飛ばされた自分の帽子を探している様子を表した曲)など5曲が演奏されました。次いで嵯峨治彦氏が登場し、黒い駿馬が草原を疾走する様子を表現した「ジョノン・ハル」など馬頭琴の演奏や喉歌を歌われました。最後はお二人のセッ



ションによりモンゴルの曲「天の風」やアイヌの歌い手・安東ウメ子氏の曲「レウレウ」などが演奏されました。国内外からシンポジウムに参加された発表者、座長、コメンテーターを含め180名を越える市民がときに繊細で、ときに力強い演奏をたん能されていました。

【シンポジウム】

記念大会として、これまで当シンポジウムを支えてきていただいた方々に広く参加を募り、次のように座長やコメンテーターをつとめていただきました。

• 基調講演

座長 岡田淳子氏(北海道東海大学)

• 第1部

座長 小谷凱宣氏(南山大学)

コメンテーター 岩崎まさみ氏(北海学園大学)

• 第2部

座長 荻原眞子氏(千葉大学)

コメンテーター 谷本一之(当館)

• 第3部

座長 岸上伸啓氏(国立民族学博物館)

コメンテーター 大島 稔氏(小樽商科大学)

• 第4部

座長 スチュアート ヘンリ氏(放送大学)

コメンテーター 岸上伸啓氏

(国立民族学博物館)

• 総合討論

座長 岸上伸啓氏(国立民族学博物館)

谷本一之(当館)

■第2日目 10月22日 [土]

【記念講演】

ウィリアム＝ワークマン(アラスカ大学名誉教授)

「北太平洋沿岸文化の国際的調査

—その過去・現在・未来—



ウィリアム＝ワークマン氏は当初から当シンポジウムに強い関心をよせていただき、過去2回発表者として参加されました。また、アラスカにおける現地調査に関して、受け入れや調査研究の助言を得るなど、同

氏ご夫妻のお世話になった日本人研究者は大変多く、今回の基調講演者として最も相応しい研究者の一人です。基調講演では次のように北太平洋沿岸研究における日本と北米の研究者との関係の歴史を概観し、新たな提案をされています。

北海道を含む北太平洋沿岸の文化についての日本と北米研究者との国際共同調査は、1960年代以降、ウイスコンシン大学のチェスター＝チャード教授や日本の岡田宏明・岡田淳子教授らが先駆けとなって、若手研究者を育成し、大きな成果をあげてきた。現在、資金的な課題もあって北太平洋沿岸文化の国際調査は充分に行われなくなっているが、私たち年配の研究者は資金支援団体などの理解を得て若手研究者に調査の機会を提供するよう努めたい。

【第1部】「北米北西海岸の文化」

・立川 陽仁（三重大学講師）

「クワクワカワクウとオヒョウ」



北米北西海岸地域の先住民・クワクワカワクウの現代におけるオヒョウ漁とその分配、消費の事例から先住民の文化的・経済的意味を分析した。オヒョウ漁は漁獲も一定せず危険もともなうが、オヒョウは現在でもごちそうとして特別の意味をもっている。また、オヒョウ漁の生業における位置づけ、とくに《マイナーサブシステム》の概念でとらえられるかどうかについても検討を加えた。

・岡庭 義行（帯広大谷短期大学助教授）

「メトラカトラーアラスカ・チムシアン^{あつれき}の社会と精神文化ー」

19世紀にキリスト教に改宗したカナダの先住民チムシアンの人びとは、2度の移住を経て、現在、アラスカ州アネット島をリザーベーションとして居住している。宣教師ウィリアム＝ダンカンの指導のもとに形成されてきた社会生活モデルのあり方、アラスカへの移住とその後の歴史をたどり、先住民でありながらカナダからアラスカへの移住者として、アラスカにおける先住民とは認定されないことなどから、新たな軋轢も生じてきている。



・アルドナ＝ジョナイティス

（アラスカ大学北方博物館長）

「一族の木と部族の盟約

ー北西海岸のトーテムポールの政治性についてー」



1960年代以降、北米北西海岸地域における先住民の伝統的文化に対する意識が高まるなかで、トーテムポールをはじめとする北米北西海岸先住民のさまざまな民族遺産を自らの手に取り戻す運動が活発になった。なかでもトーテムポールは民族集団の象徴としてだけではなく、政治的シンボルとしてもさまざまな役割を果たすようになってきた。

【第2部】「シベリア先住民の過去と現在」

・イゴール＝シシーギン（ロシア・サハ共和国・

国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館長）

「サハ共和国の博物館ネットワーク

ーその歴史、現状・課題と将来ー」



サハ共和国には多くの博物館が存在する。私どもの博物館はロシア東部においては、沿海地方の博物館よりも古く設立された、最も歴史のある博物館であり、サハの博物館の中心的な役割を果たしている。最近では、愛知万博への協力をはじめ国際的な展示や博物館



との協力関係を果たしてきている。

また、サハの先住民文化におけるロシアの影響についても、その過去と現在について概説した。

■第3日目 10月23日【日】

【第3部】「北方ユーラシアの環境と文化」

・呉人 恵（富山大学教授）

「ことばから見るコリャークのトナカイ遊牧の伝統と変容」



ロシア北東部マガダン州のトナカイ飼育民コリャークにおける現地調査をつうじて、コリャーク語における家畜トナカイの名称体系を言語学的に分析する。不毛ともみえるツンドラだがコリャークの人びとにとっては豊かな恵みをもたらす自然である。そのなかでトナカイを飼ってきたが、ペレストロイカ以後のロシア国内の政治的経済的混乱のなかで、トナカイ飼育は衰退してきている。長年にわたる言語学的調査から、トナカイの性別、年齢、用途などの名称の分析を行い家畜飼育技術の民族的知識のあり方や分類体系の認識などを考察した。

・池谷 和信（国立民族学博物館助教授）

「北東シベリアのチュクチにおける海獣狩猟の生態人類学」

北東シベリアの東端・チュコト半島の先住民チュクチにおける現代の海獣狩猟はコクジラの捕鯨を中心としたものである。また、アザラシやセイウチなどそのほかの海獣類を含めた膨大な量の海獣を利用していることもこの地の先住民経済の特徴である。コクジ



ラ猟はかつての近代的な捕鯨船によるのではなく、ライフル銃とダーティガン（ハンディーな小型捕鯨砲）、回収用鉗（もり）を組み合わせた技術によっている。これらの技術をカナダ北西沿岸の先住民が学んでいる。現在、ソ連時代の公的な狩猟組織は私企業へと転換し、多くのハンターを擁して海獣猟を行っている。海獣の肉や脂肪に対する地域の需要は高く、住民の食料としてだけではなく、養狐場でのキツネの餌などにもなっている。

・中田 篤（北海道立北方民族博物館学芸員）

「タイガ地域におけるトナカイ放牧技術
ーモンゴルのトナカイ飼育民ツァータンの事例よりー」



モンゴル北部のタイガでトナカイを飼育するツァータンにおける季節的なトナカイ放牧のあり方について、現地調査を中心に繁殖行動や出産、環境との関係から分析した。タイガのトナカイ飼育民において、トナカイを乗用に利用すること、搾乳の対象とすることで、ツンドラのトナカイ飼育民に比較して、トナカイと人の関係はより密接である。出産・搾乳期である春営地から夏の放牧地における管理、さらに以後の秋営地、冬営地におけるトナカイの管理方法の変化は、トナカイの性、年齢、母子関係、搾乳の有無、放牧地の環境などと密接な関係をもっている。

【第4部】「文化の表象と理解」

・大村 敬一（大阪大学助教授）

「Quvianaa?（楽しいかい？）」

「喜び」の経済学としてのイヌイトの生業」

カナダ極北地域の村におけるイヌイトの「狩猟」をめぐる精神的な価値観のあり方を検討した。調査で下宿しているイヌイトの家族や他の人たちから頻繁に「楽



しいかい？」と声をかけられる。イヌイトにとっては人間は「楽しく暮らす」ことが最も重要なことであるらしい。そこで、イヌイト社会のもつ「楽しい」という概念の文化的な意味を、「自然(野生生物)」と「ハンター(と妻)」との関係性について、ニュージーランドのマオリの世界観モデルを援用して分析することから、イヌイトの「楽しく」暮らす世界観のあり方について提起した。

・久保田 亮(東北大学大学院生)

「今日の客は誰だ? :

ダンス・パフォーマンスの組成に関する試論」

アラスカの先住民・チュピックの村における集団による伝統的なダンスの開催状況を観察し、それらダンスが行われた状況を目的や「観客」の違いなどから分析した。ゲストを歓迎する目的、死者に関連するものなど、状況による楽曲の違い、装身具の違いなどから、「観客」がだれであるかが強く意識されていると考える。



・齋藤玲子(北海道立北方民族博物館主任学芸員)
「カナダ北西海岸先住民と北海道アイヌの事例にみる博物館展示の変遷」



1970年代以降、民族文化を対象とする博物館は、資料の収集の経緯や展示の視点が問われ、批判されるなど、新たな展示法や先住民の協力などが模索されてきた。カナダ北西海岸先住民および北海道アイヌの文化を対象とする博物館の展示の変遷について、その内容や先住民と博物館の協力関係のあり方の事例を時代背景とともにたどった。

(学芸課 渡部 裕)

北海道立北方民族博物館とアラスカ大学北方博物館/国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館との
学術交流に関する協定書(抄)

北海道立北方民族博物館とアラスカ大学北方博物館/国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館は、北方地域に関する博物館として、両博物館の連繋を緊密なものとし、環北太平洋地域/北方アジアにおける学術研究を発展させ、両博物館、北海道とアラスカ州/サハ共和国、ひいては日本とアメリカ合衆国/ロシアの双方に有益な共通の関心を分かち合うようになることを願って、以下の協定を締結することに合意する。

1. 両博物館は国際的な友好・親善の精神に則り、相互に博物館の学術交流の推進に努力する。
2. 両博物館による交流計画は、準備しうる予算の範囲内において、下記の内容を含み得るものとする。
 - a. 研究者の交流
双方の博物館は相互に派遣された研究者へ可能な限りの便宜供与を行う
 - b. 学術共同研究
 - c. 国際的な視野からの学術共同会議、および学術上の各種の資料・文献等の交換
 - d. 収集資料および展示の交換
 - e. 個々の交流についてはそれぞれの計画に関して個別に交わした「覚書」に基づいて行う。
 - f. 交流計画の推進に当たっては、平等・互恵の原則に基づき行うものとする。
 - g. 当協定および個別の交流計画は、特別な事情が生じた場合には、どちらかの博物館が通告することによって中止させることができる。

発掘調査

能取岬西岸遺跡

2005. 6. 17 - 7. 9

標高約40mの網走市能取岬^{がけ}の崖際に「能取岬西岸遺跡」と名付けられた遺跡があります。この遺跡は1980年代の遺跡確認調査で、縄文文化中期から擦文・オホーツク文化期の土器、石器、骨角器、鉄器、動物骨などが採集され、長期にわたって使用された遺跡であることがわかりました。

当館では平成8年に、この遺跡が主に使用された時期を見極めるため、遺跡の測量調査と試掘調査を行いました。その結果、当遺跡から多くのオホーツク式土器の破片が出土したことや、沢に挟まれた大型のくぼみの状態などから当遺跡がオホーツク文化期を中心とした遺跡であり、^{たてあな}堅穴住居址は4軒以上存在した可能性があると結論づけました。しかし、この崖際の遺跡を発掘すると周縁の土地が崩落する可能性もあったため、本格的な調査は見送ってきました。

平成17年度に入って、当館は、当遺跡の本格的な継続調査に踏み切りました。今年はその1年目で、6月17日（金）から7月9日（土）までの延べ16日間にわ

たって調査を行いました。土地の崩落の危険が避けられる場所から少しずつ行い、これ以上自然崩落による遺跡の崩壊を防ぎ、ほうっておけば失われてしまう可能性が高い遺跡情報を可能な限り記録することに努めました。

まず、以前確認された堅穴住居址の位置を再度確認することから始めました。5m×5mの範囲を、約2m近く掘り下げてゆくと、オホーツク文化期の土器や動物骨、家屋の構造材等に使用されたと思われる木材が焼けた状態で出土しました。また、オホーツク文化に特有な「^{はりゆか}貼床」と呼ばれるコの字型をした「土間」の一部も、赤く焼けた状態で見つかりました。貼床の大きさから、この堅穴住居址の最大長は約10m前後と推定しています。

約2週間の短期間で確認できたことは余り多くはありませんが、来年度以降も少しずつでも調査を継続し、遠い昔、能取岬で確かに生活していたオホーツク文化人の集落遺跡の調査を通じて当時の状況の一端を探ってみたいと思います。

（学芸課 角 達之助）



《北の文化・体験スクール》 ロシアの家庭料理・体験教室

2005. 11. 3

講師：小笠原麻美氏、伊藤恵氏、広岡綾氏
(網走市ロシア語サークル)

北方民族博物館では、これまでも何度か北方の食文化を体験していただく講習会を開催してきました。今回のテーマであるロシアの家庭料理は、北方の先住民文化とは直接の関係はありませんが、広く北方の文化に親しんでいただくという趣旨で企画したものです。

メニューは、ロシアの代表的な家庭料理であるボルシチ、ペリメニ(水餃子)、ビーツのサラダの三品です。

まず最初に、参加者が手分けしてボルシチの材料となる野菜を千切りにしました。ボルシチに付きものなのが、ビーツというカブに似た野菜です。日本ではなかなか見ることのない野菜ということもあり、多くの参加者がその鮮やかな赤い色に驚いていました。

ビーツ、ニンジン、玉ねぎはフライパンで炒めます。別の鍋であらかじめ牛肉を煮込んでおき、それに炒めた野菜と調味料を加えます。最後にキャベツ、ジャガイモを加え、火が通ったら調味料で味を調べて出来上がりです。

ボルシチを煮ている間に、ペリメニ作りが始まりました。今回は時間の制約もあって、参加者には皮作りとり、その皮で具を包む作業を体験していただきました。ペリメニは包み方に特徴がありますが、作業自体は一

般的な餃子を包むのと同様です。「餃子を皮から作るのは初めて」という方もおり、出来上がったペリメニは大きさも形もさまざまでしたが、参加者全員で楽しそうに作ることができました。

ペリメニを茹でる時間を使って、ビーツのサラダを作りました。事前に柔らかくなるまで茹でておいたビーツを細切りにし、砕いたクルミやプルーンを混ぜてひまわり油で和えます。最後にマヨネーズをかけ、上からおろしたチーズをかけて完成です。



最後に、作った料理を皆で試食しました。ロシア料理は、日本ではまだ触れる機会が少ないようで、「名前は知っていたが、実際に食べるのは初めて」という声も聞かれました。味については、「日本料理にはない味」といった感想もありましたが、全体的には好評で、ボルシチなどはお代わりをする人もいらっしゃいました。
(学芸課 中田 篤)

《北の文化・体験スクール》 素敵な革細工

2005. 10. 28 , 10. 29

講師：森下造形研究室

10月21日から30日までの日程で、名古屋で革工芸の教育システムの開発、啓蒙活動、作品制作をおこなっている森下造形研究室による展覧会『森下造形研究室作品展 素敵な革工芸』が開催され、これにあわせて革細工の体験教室が同研究室の指導で行われました。28日は「ビーズ・毛皮付きポーチ」を、29日は「革でつくる動物仮面」を行いました。革細工と普段なじみのない参加者は、革とのふれあいを楽しまれていたようです。

(学芸課 笹倉いる美)



ビーズ・毛皮付きポーチ



革でつくる
動物仮面

企画展

イヌイト・アートの世界

2006. 2. 4 [土] - 3. 26 [日]

会場 北方民族博物館特別展示室
観覧料 無料

カナダ・イヌイトが制作した彫刻や版画などの現代アート作品約70点により、極北の民族芸術の世界を紹介します。

～関連講演会～

「イヌイト・アート：極北からのおくりもの」

平成18年2月4日 [土] 13:30-15:00

講師 岸上伸啓氏 (国立民族学博物館教授)

石や骨・牙^{きば}などの彫刻や版画・絵画など、カナダ極北の先住民イヌイトの現代アート制作の歴史や背景、現状について紹介します。

※道民カレッジ連携講座 1単位



「はやぶさ」
M. イッサ作
カナダ/ベーカー・レイク

INFORMATION

常設展示観覧者が

50万人に

2005.8.3



平成3年2月10日のオープン以来、当館の常設展示観覧者数が50万人に達しました。50万人目は愛媛県の野本晴仁さんでした。

また、これを記念して網走市の小林隆樹氏からイチイが寄贈されましたので、敷地内に植樹しました。



解説員研修

2005.12.7

札幌市アイヌ文化交流センターで解説員の資質向上を図るための館外研修を行いました。



事業報告

森下造形研究室作品展
『素敵な革工芸』

2005.10.21-30



寄贈資料

◆東京都の原ひろ子氏からカシヨーゴティネの資料47件が寄贈されました。



◆名古屋市の森下雅代氏から革製タペストリー他が寄贈されました。

◆国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館から馬毛製の儀礼具が寄贈されました。

北方民族博物館だより
No.59

平成17(2005)年12月16日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
電話 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org